婦人会報恩講

2023/7/10

講題　いのちの願いに生きる（いのちが見えない時代）

真宗門徒としての生活を回復しよう

①朝夕のおつとめをいたしましょう　　②声にだしてお念仏をいたしましょう

法語1　如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし
　　師主知識（ししゅちしき）の恩徳も　ほね（骨）をくだきても謝すべし

1、未来の人たちに託された願い

八十五歳の親鸞聖人が、「いのち願に生きる」決意を述べられた和讃。「粉骨砕身（ふんこつさいしん）」とは、はなはだしく骨折り働くことのたとえ。やれやれ終わった、おつかれさま、と腰をおろすためということではない。

私たちが、日常生活をおくっている日ごろの心のから起ちあがって、如来の本願のまことを、浄土の如来大悲の恩徳を身に受けて、「いにちの願に生きる」新しい出発の時を告げ知らせているのである。

法語2　はじめに尊敬あり
　　摂取不捨（えらばす、きらわず、見すてず）の心を学び、
　　真実自分自身のしたいこと、しなければならないこと、できることを、
　　他人とくらべず、あせらず、あきらめず、ていねいな生活をしていこう。
　　この3つがひとつになって、人間は生き活きするのだ。

2、自分の生き方

厳しい現実の生活の中で、「えらばず・きらわず・みすてず」の実践はとても困難だ。何故ならば、何処かしらで、人や物を選んだり、嫌ったり、見捨てて生きているからだ。口に出したとしても、出さなかったとしても、自分の経験や行動、思いの中では尊敬する気持ちなど芽生えない。

3、如来の呼びかけ　（いのち）の呼びかけ

「えらばず・きらわず・みすてず」という阿弥陀如来の心を、私たちは本質的には持っている。日常生活の中で「これで良かったのか？」と後悔したり、悩んだりしたことはないだろうか。「えらばず・きらわず・みすてず」を出来ないでいる私たちに対して、阿弥陀如来は私たちの心へ呼びかけてきているのだ。しかし、日々の生活の中での自分の思いが心の呼びかけに目を向けられないでいる。

4、念仏申す衆生が生まれる「浄土」

阿弥陀如来の本願、「えらばず・きらわず・みすてず」に触れた者は、「はじめに尊敬あり」の生活をしていく。この現実世界の中で、目の前にいる人、隣にいる人を尊敬する。そこから「えらばず・きらわず・みすてず」、「はじめに尊敬あり」という生活が始まり、浄土が開かれてくるのだと。

法語3　　善心微なるがゆえに、白道のごとしと喩う

5、私より深いところにあるいう「善心」とは具体的には何をさすのか

私の意識よりももっと深いところ、自分自身でも気づかないところに「善心」がある。その「善心」とは日常生活中でおこる「不安」。「不安」とは私の酔生夢死の生き方を揺り動かし、目覚めさせようとするいのちそのもののはたらき。つまり、「不安」だけが私の生き方を「これでよいのか」と問い続けてくるものである。その不安に耳を傾け、気づき、歩みとなった時、その道は確かな白道になる。「いのちの願い」を表す言葉。

法語4　弥陀の報土をねがうひと　外儀のすがたはことなりと
本願名号信受して　癡寐にわするることなかれ　（高僧和讃）

6、「外儀のすがた」というは、在家・出家、男子・女人をえらばざるこころなり。つぎに「本願名号信受して・・・」というは、かたちはいかようなりというとも、またつみは十悪・五逆・謗法・闡提のともがらなれども、回心懺悔して、ふかく、かかるあさましき機をすくいまします、弥陀如来の本願なりと信知して、ふたごころなく如来をたのむこころの、ねてもさめても憶念の心つねにして、わすれざるを、本願たのむ決定心をえたる、信心の行人とはいうなり。

さてこのうえには、たとい行住座臥に称名すとも、弥陀如来の御恩を報じまうす念仏なりとおもうべきなり。これを真実信心をえたる決定往生の行者とはもうすなり。　（御文　一帖　第二通）

7　お念仏申すという行いの中に無限の功徳がある

南無阿弥陀仏と声を出すのはいつ、どこでということはない、いつでもいいんだ。仕事をしておろうと、道を歩いておろうと、寝床の中に横になっておろうと、お念仏は申していい。日常生活の中で時々仏のお名前をよぶということがあって初めて、「ああ、そうか」と気がつくはたらきが起こる。

8　人間喪失

仏教は、人間というものを共に生きる者として見る。そのことによって初めて人間として生まれてきたことが完成する。もし人間として生まれて人間として生きているにもかかわらず、共に生きるというそのことが我々のところに成り立たなかったら、人間であることを失ってしまう。